

今週のメニュー

■トピックス

◇韓国 麗水^{ヨス}万博でも塩ビが活躍！

塩ビ工業・環境協会 専務理事 関 成孝

■随想

◇びっくり闘病記（その3）－手術までの過ごし方－

関東学院大学 織 朱實

■編集後記

■トピックス

◇韓国 麗水^{ヨス}万博でも塩ビが活躍！

塩ビ工業・環境協会 専務理事 関 成孝

ロンドンオリンピックの多くの競技場で塩ビが活躍していることを[以前に紹介](#)しました。2005年に愛知県で開催された愛・地球博でもそうでしたが、今年5/12～8/12まで韓国の麗水^{ヨス}で開催されている国際博覧会でも塩ビ製品が様々なところで使われています。

麗水は、対馬海峡に面し、入り組んだ入り江と島からなる風光明媚な地です。かつて、下関、博多との間をフェリーが結んでいたときがありました。万博期間中は、博多と麗水万博会場の間、280キロを高速船が3時間45分で結んでいます。ソウルから麗水までの距離は400キロですので、本当に日本から近いところです。万博のテーマである「生きている海と沿岸」にふさわしい豊かな自然がありますが、万博会場の北方で山を越えた入り江に面して、韓国最大の石油化学工業団地があり、輸出の拠点ともなっています。



会場全景

さて、万博の会場ですぐに目に付くのは、ゲートとパビリオンの間の通路にある塩ビターポリンを使用した回廊です。これらは、塩ビの再生材を使用しているとのことでした。このほか、伝統芸能ステージの覆いや、大きなテント劇場としても使用されています。憩いの広場やオブジェとして使用されているものは、夜間、色のグラデーションでライトアップされ、会場を鮮やかに飾っていました。国際パビリオンゾーンの天井4箇所にドーム状の構造物がありました。採光のためようですが、こちらは、日本



会場内の回廊

製とのことでした。同ゾーンの一部は保存して使用するとのことで、耐久性を重視したのかもしれませんが。

他にも、大きな塩ビ製バルーンがいくつか、子供達が遊べるオブジェとして置かれていました。



ゲート



伝統芸能ステージ天井



テント劇場とバルーン



天井のドーム（採光用）

会場のあちこちには、インフォメーションや救急、携帯電話充電サービスなど様々なブースがおかれていましたが、それらの窓には塩ビ製の樹脂窓枠と複層硝子が使われています。麗水は、5月の平均最低気温が13℃、8月の平均最高気温が29℃と、開催期間である5月12日～8月12日の間は比較的マイルドな気候です。それにもかかわらず、仮設の建造物でも樹脂窓が使われているということは、韓国では樹脂窓がすっかりと標準になっているということです。実は、あまりに当たり前だったので、会場の施設担当の方にお話を聞いたとき、意識さえされていませんでした。もしも長期間使うこととなっていれば、塩害に対する強さも発揮できていたものと思います。



インフォメーション・ブースと樹脂窓



韓国も、塩ビ製品を含むプラスチック全般について、リサイクルに積極的に取り組んでいます。製品毎の特性を活かしたシステムを作っています。また、日本から多くの再生材を輸入し製品製造に使用しています。国境を越えて資源が有効に利用されている一例です。ところで、[8月3日の化学工業日報社説](#)において、VECのリサイクルビジョンが紹介されています。業界の取り組みにエールを贈っていただきました。一層励んで参りたいと思います。

◇びっくり闘病記（その3）－手術までの過ごし方－

関東学院大学 織 朱實

さて、青天の霹靂のように脊髄に腫瘍が発見され、「このまま放置すれば、5年以内に間違いなく呼吸が止まり死亡します」ということで手術を受けることになったのが12月。手術日は、先生のご都合と私の仕事のスケジュール（入試期間が最大の山場）の調整結果、2か月後の2月21日に決定。

「この間に、悪化することはないでしょうか？」

「今まで、5年くらいかけて水が少しずつたまってきて今の状態になったので、2か月程度で急変することはないです。半年も放置すれば、なんらかの運動機能障害が出ると思いますけど。」

手術まで2か月。この間、どうやって心の平静を保ちながら、仕事や日常生活を行っていくかがまずクリアしなければならない大きな課題となりました。

いくら私が超楽観主義といえども、神経の塊である脊髄にメスをいれて腫瘍を無事に取り出す手術の困難さを思えば、命は助かっても、後遺症が残るリスクが高いことは明らか。さすがに怖い。戻ってこれられないかもしれないのだから、この2か月の間に仕事や諸雑事をてきぱきこなさなければならない！はずが……。病気になって初めて直面したのが、この「心が平静を保てない」状態でした。

原因は、大きく二つ。一つは、突発性ネット依存による不安増大シンドローム。脊髄腫瘍、体験、手術等、ついつい検索してしまうのです。脊髄腫瘍の中でも、髄内腫瘍はレアなので、そのリスクや病院を探す大変さ、手術の怖さ等々読めば読むほど、どっと暗くなります。私の主治医の先生は、純粹技術屋さんで「外科手術は、うまく取れればそれでおしまいですから、すばっとしていますよ」「私は、この部位は日本で一番といってもいいくらい経験がありますから（もともと症例が少ないから）」というシンプルで明確な、いかにも技術さんの説明。先生と話をしていると「たいしたことないのじゃない？」と思うのですが、ネットを見てしまうと「やはり、大変な病気なのね」と不安が募ってしまう、ということで早い時点で、病名検索はやめることにしました。

もう一つは、なんでもこれは「もしかしたら、病気のせい？」と関連付けてしまう心持です。

ちょっと頭痛がする、ちょっとつまずいてしまう、普通だったら、流してしまうことも「もしかしたら、これは腫瘍のせい？」と、ついつい考えてしまうのです。病院に検査に行くほどでもない、日常のちょっとした行動に伴う不安。これはやはり精神衛生上よくないので、なるべくこういう「不安」な気持ちになったら、楽しいことをして切り替えるようにしました。それでも、町を歩いているとふと、「急に呼吸が止まったらどうしよう」という不安が襲ってきたりしました。

立っている地面から揺るがされるような、自分の根源が脅かされるような、足元からじわじわ湧き上がってくる命にかかわる「怖い」という気持ち。

いつ死んでもいいや、それほど長生きしなくても、と常日頃思っているのですが、それでも「死にたくない」「生きていたい」と人としての本能が感じさせる「怖さ」なのでしょ

うか。そんなとき、見上げる夕焼けが冬の張りつめた空気の中、これがまたやたら綺麗に見えるのです。命の不確かさ、不安があると、今まで普通に見えてきたものが、とても綺麗で、「こんなに世界は美しいんだ」と心に染み入るものだということを病気になって、はじめて実感しました。そういえば、父の看病で疲れ切っているときも、ふと見上げた夕焼けがやけに綺麗だったりしたものです。夕焼けを見上げながら、思い出したのが、ナチスの強制収容所での生活を描いた「夜と霧」(ヴィクトール・E・フランク)の一場面。

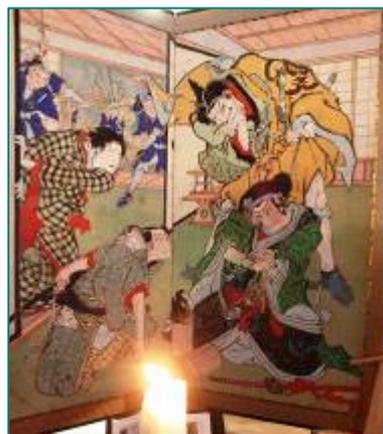
毎日の強制労働で疲れ切った収容所の中庭で、綺麗な夕焼けを声もなく見続ける人たち。そのひとりが「世界はなぜこんなに美しいのだろう」と思わずつぶやいたという話。どんな過酷な状況でも、それでも世界は「美しい」と感じる事ができる気持ち。

不安だからこそ、一層美しく心に感じ入るそんなものが、確かにこの世界にはあるのでしょうか。たぶん、今より「死」が身近だった古代の人たちは、こんな「いつ死ぬかわからない」という不安を抱えていて、だからこそ、より世界は鮮やかで、美しかったのでしょうか。ラスコーの壁画に描かれた動物や星があんなにも生き生きと私たちに訴えかけてくるのは、今の私たちより古代の人たちのほうがより「怖さ」と密着した生活をしていたからかもしれません。

もちろん一生、こんな不安を知らないで過ごせれば、それはそれで幸せでしょう。でも、この背中を震わすような、足元から崩れ落ちそうな「怖さ」を知らないで終わるよりも、日々の生活の中では忘れてしまいそうな、生きていることの不安を、生き続けることの切なさを一瞬でも感じる事ができたこと、古代から、綿々と人々が向き合ってきたこの不安を、恐れを、共有できたこと、これこそがむしろ僥倖だと、そう思いたい。手術までの、不安な日そんなことを思いながら過ごしました。

次回は、手術前の神頼み?での駆け込み騒動へと続きます。

写真は、7月21日の高知赤岡の絵金祭り。1年に1回幕末の歌舞伎絵師絵金の歌舞伎絵20数点が路上に展示され、ろうそくで鑑賞します。詳細は、私の[ブログ](#)で。



町のおばさん、もとい！
“ローカル学芸員”さんが説明

前回：[びっくり闘病記\(2\) - 脊髄腫瘍ってなに? -](#)

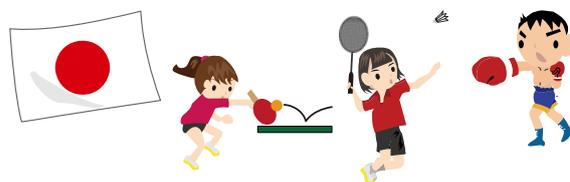
■ 編集後記

夏、真っ盛りです。日本では「今日は最高気温が34度・・・、熱中症で・・・人が運ばれ・・・」が毎日のようにニュースになっています。一方、ロンドンでは気温は低いようですが、各競技で熱戦が続いており、世界中の人に熱い感動を伝えています。日本チームでは団体やチームでの銀、銅が目立っているようにも思います。深夜は無理せず、なるべく早起して結果、速報でみていますが、多少寝不足気味です。もう折り返しかと思っていたら、甲子園が始まり、熱闘の夏はしばらく続きそうです。皆さんも体調に気をつけて暑い夏を乗り切ってください。

次週はメルマガも夏休みを取り、次号は23日に配信させていただきます。(鈴蘭)

■ 関連リンク

- [メールマガジンバックナンバー](#)
- [メールマガジン登録](#)
- [メールマガジン解除](#)



◆編集責任者 事務局長 東 幸次

■東京都中央区新川 1-4-1

■TEL 03-3297-5601 ■FAX 03-3297-5783

■URL <http://www.vec.gr.jp> ■E-MAIL info@vec.gr.jp